

○秩父産の苔類数種について (永野巖) Iwao NAGANO : Notes on some mosses found in Chichibu.

1) 次の7種が秩父地方に産することがわかったこと。

Tortula alpina (B. S. G.) Bruch. 南アルプスの西斜面、戸台川と小渋川流域の石灰岩地で高木博士が1950年、日本で初めて発見されて以来、報告がなかった。梓白岩山(海拔約1860m)と赤沢岳(1820m)で採集した。前者は戸台のものによく似ているが、後者は陰湿な石灰岩上に生えている関係で、植物体は2~2.5cm、柔い感じで、中肋の突出部も若干長めである。

Orthothecium rufescens (Dicks.) B. S. G. 今まで岡山県新見市羅生門と南アルプス戸台川白岩が記録されているだけである。武甲山(800m), 白岩山(1800-1850m), 大ガマタ沢(1750-1800m), イモノキドッケ(1800m), 赤沢岳(1820m), ベンケイ白岩山(1880m)で採った。主として陰湿な石灰岩壁に着生しているが、白岩山と大ガマタ沢の源流では稀に角岩や砂岩の壁に着生している。石灰岩の場合は赤褐色乃至黃金色で光沢があるが、角岩や砂岩の場合は淡黄緑色を呈しあまり光沢がない。

Seligeria pusilla (Hedw.) B. S. G. 南アルプスの大鹿村燕岩と熊本県五カ荘地方が知られていたが、ベンケイ白岩(1890m)と大ガマタ沢源流(1750-1800m)で採つた。いずれも石灰岩壁である。非常に微細であるため見出しにくいが、注意して調べると他の地方からも発見できるかも知れない。

Leptodontium gracillimum Noguchi 台湾の新高山が原産地で、野口博士は秩父の赤沢岳を第2の産地として報告された(1955年)。新たに三国峠(1670m)と梓白岩山(1860m)を加える。着生基盤は三国峠のものは明らかでないが、梓白岩と赤沢岳は石灰岩地である。しかし直接石灰岩肌に密着するのではなく、腐植土をともなった石灰岩とか砂礫の混った風化土の上に生えるので、石灰岩との関係はむしろうすいものと考えられる。

Bartramia ithyphylla (Hall.) Brid. 日本アルプスの高山帯に分布の中心を持つ種類であるが、産地は極めて少ない。真ノ沢(1900m), 甲武信岳(2400m), 国師岳(2000m)を加える。

Schlottheimia japonica Besch. et Card. 西南日本の各地で見られるが、関東地方では比較的稀で、記録としては Faurie 採集の富士山のものだけである。両神山頂の剣ヶ峰(1720m)で採集した。コメツガの樹幹と陽向地の乾燥した角岩上に着生していた。前者には美事なさくが沢山着いていたが、後者には全然見当らなかった。

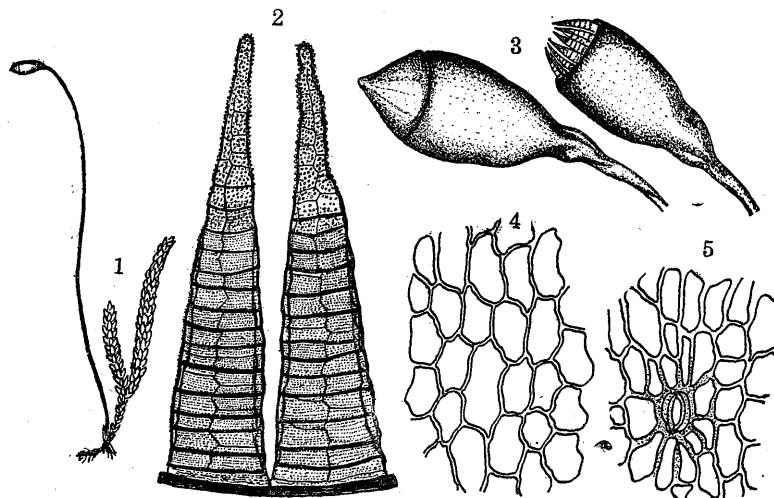
Cryphaea obovato-carpa Okamura 分布の比較的広い割に産地は至って少ない。おもに西南日本と関東地方の平野部に分布していて、一般にクワの樹皮に着生している。吉田町石間戸(イサマド)(400m)の輝緑凝灰岩の岩塊に着生しているのを採集した。

2) *Hedwigia ciliata* (Hedw.) P. Beauv. が石灰岩に着生していたこと。

この種類は世界中に広く分布していて、着生基物は siliceous な岩石に限られているようだ。日本では花崗岩、安山岩、石英閃緑岩、斑構岩、橄欖岩、玄武岩、蛇紋岩などの火成岩類や角岩、砂岩、粘板岩、礫岩などの堆積岩類、それに変成岩類（ホルンヘルス、石墨片岩、赤鉄片岩、緑泥片岩など）に着生しており、特に火成岩類と角岩に最もよく着生する傾向がある。私は 1955 年奥秩父のイモノキドッケ（1800-1850 m）の石灰岩に着生しているのを観察した。この附近は空中湿度も高く、常に陰湿な所であるが、混生種には比較的耐乾性の強いものが多い。本種は普通淡緑色乃至灰緑色をしているが、このものは黒褐色乃至赤褐色をしている。（石灰岩に着生する蘚類はこのように変色するのが通性である）。また、葉の透明尖は脱落していて、完全なものはほとんど見当らず、葉形も他の基岩のものに比べてやや広楕円形である。

3) *Myurella sibirica* (G. M.) Reimers のさくを見つけたこと。

ヨーロッパ、シベリア、北アメリカなどに分布し、日本にも各地に分布していることが近年明らかになった種類で、石灰岩地に生育する傾向が強い。しかし石灰岩壁面に直接着生することは少なく、石灰岩隙や風化石灰上に生えており、しかも日当のよい所ではなく樹林内の湿気の多い所に限られている。石灰岩に着生する蘚類の多くのように、さくをつけにくく、日本ではまだその記録がない。私は 1955 年ベンケイ岩で、さくをつけたものを採集したのでここに図示する。



1. さくをつけた植物体 ($\times 4$) 2. 齒 ($\times 200$) 3. さく ($\times 20$) 4. さくの壁の細胞 ($\times 200$)
5. さくの頭部の気孔 ($\times 200$)

終りに貴重な標本をいただいた野口彰、高木典雄両博士、ならびに調査の機会を与えられた秩父自然科学博物館新井重三主任に対し感謝する。